

2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画を振り返る

－専門職としての日本語教師の成長を支える実践記録－

半原 芳子・辻端 聡子・桑原 陽子

要 旨

本稿で取り上げる事例は、2018年9月に福井で行われた「2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画」である。この活動企画は、これまで福井・石川・富山で重ねられてきた研修およびそこで構築された基盤の上に立ち、開催されたものである。実践者の力量形成を支える会になることを展望し、従来の日本語教師研修においてしばしば採用されがちな講演型の形式は取らず、実践者が互いの事例から学び合うことを基軸にデザインされた。

本稿では、本活動企画を企画し、さらには当日多文化共生および留学生教育におけるコーディネーターとしての実践と経験を報告した筆者らが、自身らの報告内容を含めた支部活動企画の当日の様子やそこに至るまでのプロセス、企画後の振り返り、そしてその後のそれぞれの実践の展開を記述した。その上で、このような実践記録の作成が、今後専門職としての日本語教師の成長を支える要となり得ることを提起した。

キーワード：実践者の力量形成、記録化

1. 2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画までのプロセスと当日の報告

公益社団法人日本語教育学会は、地域における日本語教育の普及・推進・活性化を促進するための支部活動事業を2017年度より展開している。研究集会事業の後継事業である支部活動事業は、「第一に地域の日本語教育の学術研究を促進すること、第二に地域における日本語教育実践を促進すること、第三に地域での情報・人的交流を促進すること」を目的としている（公益社団法人日本語教育学会ホームページより¹⁾）。

北陸支部は石川県、富山県、新潟県、福井県（あいうえお順）から成り、2018年度の北陸支部活動は福井で行われた。福井で日本語教育学会関連の活動が行われるのは、2014年以來のことである。この間外国にルーツを持つ児童生徒のことが北陸支部地域においても大きな課題となっていること、そしてそのことに関わる実践が福井においても積み重ねられつつあったことから、外国にルーツを持つ子どものことをテーマとして取り上げることとなった。それは北陸支部活動委員である桑原をはじめ福井の企画メンバーのなかで、かなり早い段階で決まっていた。しかし、何に焦点を当てるかについては時間をかけ検討を重ね、結果「地域の日本語教育を支える持続可能な仕組みとは？－福井県内の小学校の事例から－」とした。それは活動の継続には仕組みづくりが重要であるにも関わらず、これまで日本語教育の領域においてそのことがなかなか取り上げられてこなかったこと、しかし今後また

ます増えることが予想される外国にルーツを持つ子どもたちの支援を考える際の鍵になるとの思いからであった。当日の具体的な内容と組み立てを以下に記す（日本語教育学会員に発信した案内を一部抜粋の上加筆）。

「地域の日本語教育を支える持続可能な仕組みとは？－福井県内の小学校の事例から－」

【日時】 2018年9月1日（土）14：00～16：00（開場・受付開始13：30）

【会場】 福井大学連携センター「Fスクエア」706・707 会議室（アオッサ7階）

【対象】 外国人に対する日本語教育・日本語学習支援に携わる方、関心のある方であればどなたでも参加できます。「日本語教育」が教室の中で、そして教室の外で地域に貢献できること、それを支える仕組みについてみなさんで考えたいと思います。

【定員】 先着40名

【内容】 外国にルーツを持つ子どもの支援がどうすれば安定的に継続するのかについて、支援の仕組みの構築と維持という観点から、福井県内の小学校の事例をもとに考えます。事例となる小学校は大学と同じ市内にあり、学生が定期的に通って子どもの支援を行っています。この支援活動を取りまく環境を観察し、支援活動の背景に様々な間接的な支援があることを確認します。その上で、日本語教育の専門家がどのように関わることを考えるのかを考えます。

総合司会：桑原陽子（福井大学語学センター）

14：00～ 開会挨拶・趣旨説明

14：05～

報告1「福井市A 小学校における支援」 半原芳子氏（福井大学連合教職大学院）

報告2「公益社団法人ふくい市民国際交流協会の取組」 辻端聡子氏（公益社団法人ふくい市民国際交流協会）

報告3「福井大学の取組」 桑原陽子（福井大学語学センター）

問題提起 半原芳子氏（福井大学連合教職大学院）

15：05～ テーブルセッション

15：35～ 全体セッション

ファシリテーター 隼瀬悠里氏（福井大学連合教職大学院）

当日の参加者は40名（日本語教育学会員14名、一般26名）で、福井の外国の子どもをサポートする団体やボランティアグループのメンバー、学校教員、学生をはじめ、石川と富山の日本語教育関係者らが参加した。石川と富山のメンバーは、主にこの間北陸の支部活動事業を共に進めてきた方たちである。今回は、講演の形式は敢えてとらず、福井の事例（話題提起）をもとに、参加者が自分たちの実践を振り返ることおよび当該テーマについて共に考え進めることを大切にしたい。石川と富山のメンバーがテーブルセッションのファシリテーターを務め、活動を支えてくれた。また、総合司会は桑原が務めたが、ファシリテーターには教師教育学と比較教育学が専門の福井大学連合教職大学院の隼瀬

悠里氏を迎えた。日本語教育が専門でない方と日本語教育の現状を一緒に読み解いていきたいという意図と、本テーマは分野・領域を超え議論することで知見が耕されると考えたからである。

第2節では当日の半原、辻端、桑原の実践報告、第3節ではこの企画の全体的な振り返りと、その後のそれぞれの実践の展開を記述する。

2. 当日の実践報告—互いの実践を語り合い聴き取りながら、実践に関わる主題を掘り下げ探究する—

2-1. 報告1：福井市A小学校における支援（半原芳子）

2018年度福井市に在籍する外国籍の子どもの人数と国籍は、小学生76人（フィリピン 19、ブラジル 13、韓国 3、タイ 2、ペルー 2、ロシア 2、アメリカ 2、インドネシア 1、バングラデシュ 1、ベトナム 1、マレーシア 1）、中学生37人（ブラジル 13、中国 9、フィリピン 8、ベトナム 3、ペルー 3、韓国 1、マレーシア 1、ロシア 1）ⁱⁱであり、隣の越前市には外国人を雇用している企業があることなどから、さらに多くの外国籍児童生徒がいる。つまり福井県は他県に比べ決して少なくない人数の外国にルーツを持つ子どもたちがいる状況である。そうした状況を受け、加配教員の配置や、福井市では公益社団法人ふくい市民国際交流協会による日本語初期指導が行われているが、地域と共にある大学ができることもあると考え、2014年3月から、福井大学の日本人学生と留学生と協働で、福井における外国にルーツを持つ子どもたちへの「教科・母語・日本語相互育成学習」プロジェクトを開始した。それは教科の学習を、子どもの母語と第二言語である日本語で行うものである。ある一人の中国出身の子どもへの学習支援から始まった本プロジェクトは、5年度目を迎えた現在、複数の公立小中学校で学習支援を行うまでに至っている。そのうちの一つに福井市A小学校がある。A小学校にはフィリピン出身の姉（Kちゃん：小学校中学年）と弟（J君：小学校低学年）が在籍しており、2017年7月から現在（2018年9月）に至るまで、週に1回80分、取り出し支援の形で、教科・母語・日本語相互育成学習を行っている。姉弟の家庭言語は英語であり、2017年に出会った時の一番強い言語は英語であったため、英語と日本語で、在籍学級で行われている国語の学習を進めている。

A小学校の学習支援には、福井大学連合教職大学院のコーディネーターリサーチャーであるフィリピン出身の教員ならびに、国際地域学部・教育地域科学部ⁱⁱⁱ・工学部の日本人の学部学生、そして教員研修留学生が協力してくれている。80分のうち、前半は教員研修留学生が英語で学習を進め、後半は日本人学生が日本語で学習を進める。KちゃんとJ君の発達や成長も目覚しいが、ここでは特に支援者同士の学び合いや協働に注目したい。以下は、2017年度にかかわってくれたブータンからの教員研修留学生であるSさんと、日本人学生で当時教育地域科学部4年生だったEさんの支援後のメールでのやりとりである。

Dear everyone,

I just want to let you know that I had a great time reading story to J-kun. He is a smart boy. The way he diverted my attention from the story by asking other questions not related to the story, made me realize he is intelligent too. You know what? He is really skilled in doing that. I didn't even notice that during the lesson because the flow was so smooth with the conversation coming in from

the either side. It was last night that while I was thinking about the entire session I had with him, I realized I had been carried away several times by his talks amid reading him a story. That's so surprising, the boy of his age being able to wash others with his talks. So far, I did encounter a few kids trying to do that but somehow I used to get a feeling of them trying for it during the session itself. This didn't happen to me in case of J-kun. He is really smart.

He finds difficulty in pronouncing three syllable words but I am sure he will make it with time. This shouldn't be a problem though.

All in all I had fun teaching him and for this lovely experience, thank you all. I look forward to enjoying many more lessons with J-kun.

Regards,

S

Dear everyone,

A-san and I read the story with K-chan and had a great time with her.

She is a nice girl and always takes care about her brother, J-kun. They have a good relationship. At first, we read the story in English because we could get English translation. I am glad to hear that she could understand the story and enjoyed reading it. Then she tried to answer some questions we made about the story. Some questions were difficult for her, but she could finish. That's good. We have not finished the story yet, so we're going to read the rest of the story and prepare the questions about it to make sure her understanding.

I think that she doesn't have enough opportunities to write and read in English. So, we want to study with her in plenty of time.

I'm looking forward to seeing you next Monday. Thank you.)

Regards,

E

ここでは、Sさんが、支援中自身が提案した学習の筋をJ君が巧みにそらそうとしてくるかわいらしい様子を伝えている。そして、J君にはいくつか発音が難しい英語の音があるが、それはたいした問題ではなく、長い学習のなかで修正されるだろうという見解を述べている。Eさんは、KちゃんとJ君が仲の良い姉弟であることを見て取っている。また、学習の様子から、Kちゃんがこれまで十分に英語の文章を読んだり書いたりする機会がなかったであろうことを想像しながら、これからたくさん時間をかけ共に学んでいきたいという気持ちを綴っている。外国にルーツを持つ子どもたちの背景や状況、成長は様々である。そのなかで、SさんとEさんをはじめ日本人学生と留学生らは子どもたちの健やかな発達と成長という共通の願いを持ち、子どもと継続的に関わりながら、自分たちの支援のあり方や社会のあり方を模索している。

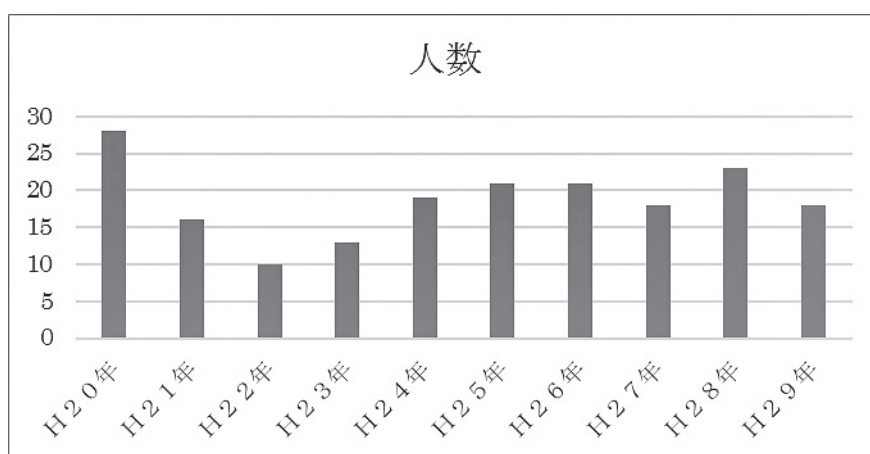
前述のように本プロジェクトは現在複数の公立小中学校で展開しており、それぞれの取り組みにお

いて特筆すべき特徴がある。本プロジェクトのコーディネーターである半原は、A小学校の事例を通じ、上述のような学習支援者（日本人学生と留学生）間の協働の価値に注目するようになった。この協働の支えとなっているものは何かと考えた時、公益社団法人ふくい市民国際交流協会の辻端聡子氏の取り組みと福井大学の桑原陽子氏の取り組みが間接的な支えになっていると感じている。以下、辻端氏と桑原氏の取り組みの報告へと移る。

2-2. 報告2：公益社団法人ふくい市民国際交流協会における外国籍児童生徒へのサポート事業について（辻端聡子）

ふくい市民国際交流協会では、福井市教育委員会からの委託を受け、日本語が不自由な外国人児童生徒や帰国児童生徒在籍校へ日本語指導ボランティアおよび通訳ボランティアを派遣している。日本語指導ボランティアは、週1～2回、外国籍児童生徒在籍校にて日本語の個人指導を行い、通訳ボランティアは児童生徒および保護者と学校間の通訳を行う。

また、日本語指導ボランティアおよび通訳ボランティアを対象とした研修や、教材の研究・開発など、技能向上や知識習得にあたるとともに、ボランティア間の情報・意見交換を行うための運営会議を定期的に開催している。



【参考】福井市の小中学校に在籍する日本語指導が必要な外国籍児童生徒数の推移
(派遣実績から辻端作成)

当協会にボランティア登録している日本語指導ボランティアは、40代から70代の元教師、主婦、定年退職者など様々で、指導歴についても1年未満の方から20数年と幅がある。

日本語指導ボランティアは、外国籍児童生徒が在籍する学校へ出向いて個別指導を行うため、ボランティアへの負担が大きい。そのため、ボランティアが責任や悩みを一人で抱えこまないよう、ボランティア全員で指導を受けている子どもたちの状況を把握し、ボランティアが抱える課題や悩みを共有し、共に解決策を考えるために定期的に運営会議を開催している。運営会議で出された意見は、必要であれば教育委員会や学校とも共有している。

運営会議では、日本語指導を受けている外国籍児童生徒への指導法や日本語学習の進捗状況のこと

以外に、母学級での様子や家庭環境、児童生徒がボランティアに打ち明ける悩みや不満などについての話もよく出る。これからの情報や意見をもとに、以下のような取組みを行っている。

(1) 子どもたちの母国の文化を知ってもらうための壁新聞を作成

外国籍児童生徒の母国の学校生活について理解してもらうための壁新聞を、留学生への聞き取りをもとに作成した。これまでに、ブラジル、中国、韓国、ベトナムの壁新聞を作成し、福井市内の全小中学校へ送った。※稿末に実物を掲載

(2) 日本語指導カリキュラム作り

ボランティアの指導歴に関わらず均一のサポートができるように、「小学生低学年用カリキュラム」、「小学生高学年および中学生用のカリキュラム」を作成した。

(3) 副教材作成

ボランティアが朝の会や給食の時間にクラスに入り聞き取りした、学校に編入したばかりの児童生徒が学校生活ですぐに耳にする言葉について、副教材を作成した。また、絵の得意なボランティアが、動詞・形容詞カードなどの副教材を作成した。※稿末に実物を掲載

(4) 日本語指導を終了した子どもたちも参加できるサポートクラスの開催

外国籍児童生徒在籍校での日本語指導は最長一年で終了するため、指導終了後も教科等のサポートができるよう、長期休暇中および放課後にサポートクラスを開いている。



以上のように、子どもたちに直接指導にあたるボランティアの声をもとに様々な取組みをしてきた。しかし、取組みを進めるにつれて、日本語指導だけではなく、子どもの心、母国語、進学についてなど、様々なサポートが必要だと感じるようになった。日本語指導を必要とする子どもたちの背景も多様で、日本生まれ日本育ちの子どももいれば、中学生になって編入してくる子や日本人の帰国子女もいる。母国語についても、読み書きができる子、母国語を聞いて理解することはできるが読み書きはできない子、母国語を理解しない子など、様々な子どもがおり、限られた日本語指導の期間内ではとても対処しきれないと感じる。

しかし、数年前から、福井大学の学生や留学生が学校へ入り外国籍児童生徒の教科指導を行っており、子どもたちへのサポートの層が格段に厚くなっていることを感じる。子どもたちを取り巻く輪が今後もより一層の厚みを持ち広がっていくことを願いながら、一步一步歩みを進めていきたい。

しかし、数年前から、福井大学の学生や留学生が学校へ入り外国籍児童生徒の教科指導を行っており、子どもたちへのサポートの層が格段に厚くなっていることを感じる。子どもたちを取り巻く輪が今後もより一層の厚みを持ち広がっていくことを願いながら、一步一步歩みを進めていきたい。

2-3. 報告3：福井大学の取組（桑原陽子）

ここでは、福井大学で発表者が携わっている業務および取組みについて紹介する。ここで紹介した取組みは次の5つである。

(1) 日本語教育関連の授業

(2) UPASS (University Peer Academic Support Service)

(3) 教員研修留学生の受け入れと日本語教育

(4) 「実践を聞く会 (仮名)」

(5) 日本語教育支援講座

これらは、いずれも外国にルーツを持つ子どもたちの支援に直接かかわるものではなく、それを意図して実施されているものでもない。本発表では、これらの業務・取組が外国にルーツを持つ子どもたちの支援の間接的な支えになっているという前提に立った場合、どのようにとらえなおすことができるのかを考える材料として、提供するものである。

(1) は、福井大学国際地域学部2年生(約60名)の必修科目として開講されている授業「コミュニケーションのための日本語教育論」である。この授業は、日本語教師教育を目指すものではない。自分の母語を非母語話者に説明することを通して、自身の言語活動を振り返ることを目的としている。日本語教育特有の文法用語等についての講義もあるが、身近な言語データを収集して観察したり、個別の事例について非母語話者にどう説明するかを考えたりする活動を中心に授業を進めている。

(2) は、語学センターが取り組んでいる学生チューターによる学修サポートシステムである。英語部門と日本語部門があり、日本語部門では日本人学生が留学生のための日本語サポートを行っている。日本語サポートを行うチューター希望者は、英語・日本語部門共通のオリエンテーションを受けた後、日本語に特化したオリエンテーションを受けることになっている。現在、チューターの中心である国際地域学部の学生は、(2)の授業を受講しているため、非母語話者に日本語について説明することのイメージは、ある程度できていると推測している。その意味では、(2)は(1)の実践の場であるとも言えるし、(1)は(2)への動機づけになっているとも考えられる。また、日本語チューターの中には、外国にルーツを持つ子どもたちの支援にも関わっている者がおり、そのような子どもの支援活動とUPASSの活動が互いに影響を与えあっていることが推測される。

(3)の教員研修留学生とは、諸外国の教員であり所定の日本の大学において学校教育に関する研究を行う外国人留学生と定義される。現職の学校教員が、日本の大学院で教育について1年間専門的に学ぶコースの留学生で、大学院で研究を行う前に半年間の日本語集中コースがある。福井大学では、語学センターで1週間に13コマの日本語の集中授業を受けている。彼らは来日後に初めて日本語の学習を開始するものがほとんどであるため、日本語力は十分ではない。しかし、豊富な経験を持つ教師であることを生かして、外国にルーツを持つ子どもたちの支援活動に参加する者もある。

(4)は有志による10名前後の集まりで、「実践を聞く会」は本論文中で言及するための仮名である。この会は、外国にルーツを持つ子供たちの日本語のサポートや留学先での日本語のティーチングアシスタントなど、学生の日本語に関わる実践をじっくり聞かせてもらうという趣旨で始まった。背景の異なる聞き手が、それぞれの興味関心をもとに、報告に対してどのような視点でコメントするかを重視しており、聞き手の専門領域は日本語教育、英語教育、英文学、教育学等さまざまである。ここで語り手となった学生の中には(2)のチューター候補者が含まれる。

(5)は、語学センターで運営・開催している日本語教育に関わる専門家を招いた講演やワークショップである。目的は、日本語教育についての専門的な知識を得ることで、学内学外を問わず、日本語教育・日本語学習支援に携わる人、日本語教育に関心がある人であれば誰でも参加できる。日本

語学習支援に関わるボランティアや支援者、教育関係者がこの講座に参加し、新しい知識を得たり、互いの情報を共有したりする場として活用してもらいたいと考えている。この講座は学外の参加者が中心となっているが、学内の学生・教員の参加もある。また、それらの学生や教員は(2)(4)への参加者であることが多い。

このようにみていくと、(1)から(5)の業務・取組は、それぞれ個別に行われているものだが、部分的に重なりがあり、結果として互いが関連しあっている様子が見える。

3. 「2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画」の企画者としてのふり返りと、それぞれのその後の動き

3-1. 企画者としてのふり返り

今回この北陸支部活動企画を福井で開催するにあたり、もともと日本語教育関係者のみの閉じた会にはしたくないという思いがあった。また、参加者が互いの実践からじっくり学び合うというスタイルを大事にしたいと考えた。なぜなら、日本語教育関係者のみで自分たちにしか分からないような言葉を使い合うこと、四角四面の空間で一方行的に講義を聞くこと、そして、報告したとしても20分で「発表」終了のベルが鳴るような研究会や研修会が、そこに集う、自分たちを含めた実践者たちの力量を豊かに培うことは難しいように思えたからである。そのため、今回ファシリテーターとして教師教育学と比較教育学が専門の隼瀬悠里氏を迎え、登壇者である半原、辻端、桑原は講演者ではなく事例報告者という位置づけであることを大切にしたい。そして、我々の実践報告を受け、参加者が自分たちの実践を語る時間を最大限設けるようにした。会場は小グループで実践交流がしやすいよう、ラウンドテーブルのように机と椅子を配置した。

当日隼瀬氏は、日本語教育と自身の専門領域の共通点を提示しながら、さらには日本語教育における多様な取り組みの蓄積とこの会の持ち方について、終始価値を当て続けてくれた。また、これまで北陸で日本語教育の研究会や研修会を共につくってきた石川と富山の方たちは、グループセッションの際ファシリテーターを務めてくれた。そして、そこで語られる実践の文脈を丁寧に聴き取り、また自分たちの取り組みを伝えてくれた。

本企画を考え始めた当初、我々は今回テーマとして掲げた「地域の日本語教育を支える持続可能な仕組みとは？」について、ある答えが導きだされることを期待した。しかし、企画者として内容を詰めていく際、つまり計画段階においてこの問いにはすぐさま結論が出ないことが分かってきた。そのため、企画や準備を進めることにストレスを感じたり不安を覚えたりすることがあった。それは今思えば、地域の日本語教育を本気で支えようとするならば、一回きりのイベントではなく、地域の実践者の力量形成を支える研修や学び合いの場を継続的・発展的に開いていくことが必要であることに気づいた故の自覚と責任の芽生えによるものだったように思う。「2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画」が終わった今でも、ここで提起したテーマはやはり大事で考え続けたい問いだと思っている。「地域の日本語教育を支える持続可能な仕組み」の構築は、「持続可能な研修や学び合いの場」の構築と問いを一にするのかもしれない。

3-2. 今、進みつつあること、考えつつあること

ここでは半原、辻端、桑原が、「2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画」にて報告した自分たちの取り組みを踏まえ、その後考え始めたことや動き始めた状況について、それぞれ記述する。

半原：

2019年1月現在、いくつかの新しい動きがある。一つは、日本語教育界を大きく揺るがすニュースである。2018年12月8日に外国人労働者の受け入れ拡大を図る「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が成立し、2019年4月から施行される運びとなった。このことにより、日本にはかつてないほどの人数の外国人がやってくることになる。外国人労働者の受け入れに向け、日本語能力の判定や日本語学習プログラムの内容、実施機関、人材確保等を早急に行う必要性が叫ばれ、その整備に向けた動きが進みつつある。その場しのぎの短期的な対応ではなく、かれらの生活や仕事や家庭をより良く支え、また日本人住民との共生をいかに実現していくか、日本語教育のあり方が今まで以上に問われることになるだろう。

外国にルーツを持つ子どもたちはますます増え、その背景も状況もより多様に複雑になることが予想される。そのことと連動する動きになると思うが、現在福井県内の福祉施設との連携・協力が始まろうとしている。これまで主に公立小中学校で、その学校に在籍する外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援を行ってきたが、今後はその取り組みを継続させつつ、福祉施設における外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援の可能性を探っていきたい。具体的なことは決まっておらず詳細はまだ書けないが、施設職員との打ち合わせが始まっている。本プロジェクトが次の段階に進みつつあることを感じている。

辻端：

今回開催された「2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画」には、当協会でも活動する日本語指導ボランティアも参加し、実践報告1「福井市A小学校における支援」に関わる大学生の話を聞くことができた。当協会のボランティアと福井大学の学生は、同じ学校で支援活動をすることもあるが、子どもたちと年齢の近い大学生の関わり方には学ぶところがとても多く、「2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画」以降に開催した運営会議では、大学生の取り組みについてもっと話を聞きたいという声が多数上がり、現在、半原先生と日程調整を進めている。日本語指導ボランティアと大学生が実践を共有することで、外国籍児童生徒の支援への取組みがより広がっていくことを期待する。

桑原：

「2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画」では、「外国にルーツを持つ子どもたちの支援」という軸で、(1)から(5)について紹介した。しかし、実はこれ以外にも「外国にルーツを持つ子どもたちの支援」にとって間接的なサポートとなっていると考えられる取組がある。本節ではそれらについて言及し、これからの取り組みの展望としたい。

まず、大学院教育学研究科学校教育専攻で担当している「日本語教育特論」「日本語教育特別演習」である。この授業の受講生のほとんどが日本語を専攻とする中国人留学生で、2018年度後期は6名の

中国人留学生が受講している。この授業では、日本語教育学会誌『日本語教育』の最新号から各自が論文を選択して担当者となり、全員で論文を講読している。選択された論文の中には子どもの日本語習得に関わるものもあり、バイリンガル教育を支える理論やリテラシー教育の必要性などについて学ぶ時間となっている。この授業の受講生の中には、福井市内の中国人児童・生徒に対する母語での学習支援に関わっている者もあり、それらの学生の体験談が授業中に共有される。そのことで授業での討論が深められるという利点がある。

次は、福井大学公開講座「日本語の教え方スキルアップ専門講座」である。これは、(5)の教育支援講座よりもさらに専門的な講義としての役割を持つ。この講座の受講者はほとんどが学外の日本語学習支援者で、(5)の参加者とも重複する方が多く、外国人の子どもの支援に関わっている方の参加も目立つ。そういった受講生とのやり取りの中から、新たな講座のニーズが見つかり、それが次回の講座のアイデアとなると同時に、講座全体の見直しにつながっている。

最後は、本学共通教育科目の「多文化コミュニケーションA」から「多文化コミュニケーションC」の3科目である。これは留学生と日本人学生の共修科目で、多文化共生に関わる講義・グループ活動を中心とした授業である。留学生と日本人学生の協働課題を課すことができるという利点を生かせば、授業のテーマ設定次第で受講生の目を学内外の活動に向けさせ行動を促すことが可能である。

4. 実践記録の意義

本稿では、「2018年度日本語教育学会北陸支部活動企画」を企画し、当日多文化共生および留学生教育におけるコーディネーターとしての実践と経験を報告した筆者らが、自身らの報告内容を含めた支部活動企画の当日の様子やそこに至るまでのプロセス、企画後の振り返り、そして、その後それぞれの実践において考え始めたことや動き始めた状況について記述した。今後この記録を支えにしながら、お互いの実践と経験を継続的に吟味し発展させつつ、また、福井および北陸地域の研修会や学び合いの場の充実を図っていきたいと考えている。

筆者らは所属や活動の場は異なるが、自分たちが取り組み始めたことを記録しておくこと、また、中・長期に渡る自身の実践を振り返り、それを残すことが大事であるとの共通認識を持っている。なぜ記録しておくことが大事なのか、あるいはなぜ大事だと思ようになったかはそれぞれの経験に基づくものであり、表し方も異なるだろう。ここでは、筆者の一人である半原が実践記録の意義を考え始めるようになったきっかけを紹介する。

半原は2004年に、ショーン(1983)のreflection概念の基盤の上に立つ日本語教員養成のための「共生日本語教育実習」(於：お茶の水女子大学大学院日本語教育コース)に参加した経験を持つ。共生日本語教育実習は、実習生である大学院生らが多言語多文化共生社会を構築するための新たな日本語教育実践を計画し、実践し、そして自分たちの実践を振り返ることを基軸にデザインされている。半原は2004年から2011年まで、実習生として実践する側、そして実習生を支える側として共生日本語教育実習に関わりながら日本語教師としての自身の成長の模索を続けた。2013年10月に福井大学教職大学院(現在は、福井大学連合教職大学院)に着任して以降は、専門職としての学校教員の教師教育、ならびに履修証明プログラムにおける地域コーディネーターの研修に同僚と協働しながら関わっている。福

井大学教職大学院においても履修証明プログラムにおいても、実践者である学校教員や地域コーディネーターの生涯に渡る成長を支えるためのカリキュラムやプログラムが編まれ、そこでは実践記録が大事にされている。半原は、福井大学教職大学院の大学院生や福井の公民館主事をはじめとする地域コーディネーターらの実践記録の執筆に同行するなか、実践記録の意義を本格的に考え始めるようになった。ここでは、そのきっかけの一つ、すなわち自身の共生日本語教育実習での経験をさらに前進させ、記録を書くことの意義を探究したいと思うようになった柳沢（1999）の提起「実践の持続的な発展を支える記録－三つの実践記録を手がかりに－」のある文章を、少し長い抜粋となるが紹介したい。

「戦後、とりわけ1950年代の実践記録の中には、話し合うこと、そして書くことを通して自分たちの日常、自分たちをとりまく現状を問い返していくプロセスが描き出され、その新しい表現は新鮮な驚きとともに社会的に受け止められていった。こうした記録の中には、自分たちの学習の記録、話し合いの記録の丹念な積み重ねから生まれた記録が存在している。大田克編『農村のサークル活動』（1957）の冒頭に収録された埼玉県浦和市西堀青年学級「ロハ台」の記録「オイソラ連中の共同学習」（正木欽七）は、公民館の分館で行われていた青年学級の話し合いの展開を伝えている。青年会と公民館が地区ごとにはじめた青年学級にあつまる青年たちの話し合い、「だべり会」は、講師の大田堯が話し合いの記録を取り始めることによって、変化し始める。第二回目の晩、大田がガリ刷りしてきた話し合いの記録がくばられる。『「また役場の通知でもきたか」ぐらいに思って、ろくに中味をみようとしなかった」メンバーも、大田がこれを読みはじめると、「義ちゃん、憲さん、清ちゃんなど、ふだん呼び合っている仲間の名前がとび出して」くる記録に「ほがらかな笑いがおこり、頭をかいててれるものもいた」と正木は記している。「自分のふだんの姿勢の中でしゃべったこと、すなおな思考の跡が、鏡にうつしだされたよろこび」と「ふだんのしゃべりあいの中に、実は大事な問題がふくまれているということを知った」ことに正木は意味を見いだしている。

語られたことを記録し、その記録を読み合いながらさらに語り合う。その場限りで消えていくはずの言葉が記録化され、時を経て、もう一度たどり直される。その時のことを思い起こし、ふりかえりながら、あらためてそれについて感じたこと考えたことが重ねられる。こうしたふりかえりと記録に裏打ちされるとき、一つの発言や行為も、その場だけのものから、将来にわたって問い返されるはずのものとなる。自分のいまの発言や行為が、いまこの場と同時に、活動のその後に対してどのように働くかを意識するようになる。記録は一つの話し合いともう一つの話し合いを結び、二つの時間を結んで、より長い展望の中で考える奥行きをもたらす。一つの実践と、それを受けた次の実践と、そしてその後が続く実践の展開を見通しながら、いまの実践の焦点を見定めていく力の糸口がそこにあるように思われる。」

戦後から今日にかけ、社会教育および学校教育においては、この間豊かな実践記録が積み重ねられてきている。日本語教育や国際交流の分野は誕生して間もないこともあり、実践記録の蓄積は社会教育や学校教育に比べるとまだ堵についたばかりだと言えよう。それでも、お茶の水女子大学大学院日本語教育コースにおける共生日本語教育実習の記録の蓄積や、早稲田大学大学院日本語教育研究科に

よる実践研究の意味と可能性の探究に基づく一連の刊行物^{iv}、そして成人学習論の視点からふり返りの意義を提起した池田・朱（2017）による継続的な記録がある。また、筆者らの管見の狭さゆえ辿りつけていない記録もあるだろう。

中・長期に渡る実践と省察の営みおよびそれを記録にしていくことは、今後専門職としての日本語教師の力量形成のあり方を議論する際の要になると考える。なぜなら、実践記録の作成は、第一に専門職としての責務を果たすことを支え、そしてそのことと連動しながら、自分たちの仕事をより価値のあるものへと発展させることを支えると考えられるからである。日本語教師および国際交流協会職員、多文化共生に関わる地域コーディネーターらは、日本および世界の動向、そしてそのことと密接に関わる法の改正や公的事業と切り離せない仕事を担っている。したがって、必然的にその公的な仕事の内実と価値を公に示すこと、つまり「書いて公表する」ことが求められることになる。通常我々は、既存の事業や新規事業において「フォーマット」のある報告書を作成することが多い。しかしながら、ここで提起する実践記録は、そうした報告書と一線を画すものであることを強調したい。自分たちの取り組みを人々のより良い暮らしや共生に還元できるものにするためには、その実践の価値を継続的に吟味し、発展させていく必要がある。その際、事業毎や単年度で区切られ、さらには項目を埋め、達成度としての数字を書き込むような報告書では、その助けにはなりにくい。実践記録がもっとも支えとなる資料となり、また数値では表せない部分の評価に込め得るものになる。

自身の長い実践の展開を跡付け、吟味し、その価値を探ること、そして自身の成長や展開を支える要因や編成、組織を探りながら、その働きを描き出すこと、さらにそこから今後の展望を見通し、模索すること。その継続的な営みは自身を支えることにとどまらず、同じ空間を共有していない同志や仲間の成長を支えることへとつながる。自分が生涯のうちに経験できる実践は限られている。そのため、自身の力量を培うためには他者の経験に学ぶことが重要となるが、その際結果からではなく、実践記録により他者の実践のプロセスから学ぶことができたなら、読み手であるその実践者の思考力や判断力がより磨かれ、実践の展開の選択肢をより豊かに持つことができるだろう。また、「書かれたもの」は未来永劫に残る。そのため、実践記録はいくつかの世代に渡る共有の財産、言い換えれば同じ時代を生きる者だけでなく、後世の人たちの実践や成長をも支えるものになるだろう。

実践記録の作成のためには、そのことを持続的に支える仕組みづくりが不可欠となる。日々仕事に追われるなか、自身の活動の内実を問い返す記録の作成は相当困難であり、それは我々の日常を思えば想像に難くない。その知見については、今後、豊かな実践記録の蓄積がある社会教育や学校教育の事例から学んでいきたいと考えている。

注

- i 2019年12月26日閲覧 <http://www.nkg.or.jp/shibu>
- ii 公益社団法人ふくい市民国際交流協会の情報提供によるもの
- iii 教育地域科学部は改組により、現在学生の募集は行われていない
- iv 細川・三代編（2014）に詳しい

引用・参考文献

- 池田広子・朱桂栄（2017）『実践のふり返しによる日本語教師教育－成人学習論の視点から－』鳳書房
- お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間文化研究科言語文化専攻日本語教育コース教育実習報告書
編集委員会（2000）『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』
- お茶の水女子大学大学院博士前期課程人間文化研究科言語文化専攻日本語教育コース教育実習報告書
編集委員会（2001）『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース（2002）『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成
日本語教育実習を振り返る』1999～2001年度科学研究費 基盤研究（C）「内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築」研究成果報告書（実践報告編）課題番号11680312 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース（2003）『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成
日本語教育実習を振り返る』2002～2005年度科学研究費 基盤研究（B）「多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究」研究成果報告書（実践編）課題番号14380117 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース（2004）『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成－
日本語教育実習を振り返る－』2002～2005年度科学研究費 基盤研究（B）「多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究」研究成果報告書（実践編）課題番号14380117 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース（2005）『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成－
日本語教育実習を振り返る－』2002～2005年度科学研究費 基盤研究（B）「多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究」研究成果報告書（実践編）課題番号14380117 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース（2006）『多言語多文化社会を切り開く日本語教員養成－
日本語教育実習を振り返る－』2002～2005年度科学研究費 基盤研究（B）「多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究」研究成果報告書（実践編）課題番号14380117 研究代表者 岡崎眸
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース（2007）『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究－日本語教育実習を振り返る－』
- お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻岡崎眸研究室（2009）『大学院で考える新しい日本語教育－共生日本語教育実習とアカデミック日本語教室－』
- お茶の水女子大学大学院岡崎研究室（2011）『2010年度「共生日本語教育実習」実践報告』2007～2010年度科学研究費 基盤研究（B）「多文化共生社会におけるビジネス共生日本語教育の構築と教員養成に関する研究」研究成果報告書（教員養成編）課題番号19320075 研究代表者 岡崎眸
- 国立市公民館保育室運営会議編（1979）『子どもをあずける』未来社
- 半原芳子・柴岡小百合（2015）「福井の外国籍児童生徒の学びを支える－実践の展開を辿り今後の方

- 向性を見出すー』『教師教育研究』8, 275-286.
- 半原芳子 (2016) 「持続可能な多言語多文化共生社会の構築に向けた協働探究のプロセスー福井における外国籍児童生徒への学習支援の展開を跡づけるー」『教師教育研究』9, 233-240.
- 半原芳子 (2017) 「福井における外国籍児童生徒への学習支援の展開を跡づけるーコーディネーターとしての力量形成のプロセスー」『教師教育研究』10, 231-239.
- 半原芳子 (2018) 「外国籍児童生徒への協働的学習支援プロジェクトを跡づける」『教師教育研究』11, 225-236.
- 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会 (2012) 『学び合うコミュニティを培う 第1年次報告書』, 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会
- 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会 (2013) 『学び合うコミュニティを培う 第2年次報告書』, 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会
- 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会 (2014) 『学び合うコミュニティを培う 第3年次報告書』, 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会
- 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会 (2015) 『学び合うコミュニティを培う 第4年次報告書』, 福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会
- 細川英雄・三代純平編 (2014) 『実践研究は何をめざすかー日本語教育における実践研究の意味と可能性』ココ出版
- 松下 拓 (1981) 『健康問題と住民の組織活動』勁草書房
- 柳沢昌一 (1999) 「実践の持続的な発展を支える記録ー三つの実践記録を手がかりにー」『月刊社会教育』第43巻第6号 (通号524号), 国土社, 6-13.
- 柳沢昌一 (2010) 「アイデンティティの時間 / コミュニティの時間」『福井大学教職大学院 Newsletter』27, 379.
- 柳沢昌一 (2011) 「実践と省察の組織化としての教育実践研究」『教育学研究』78, 423-438.
- 柳澤昌一 (2016) 『省察的実践の力を培う学習コミュニティとその編成』2013~2015年度科学研究費基盤研究 (C) 「社会教育職員の省察的実践者としての力量形成と組織学習に関する事例研究とその理論化」報告書 課題番号25381075研究代表者 柳澤昌一
- 横溝紳一郎 (2000) 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社
- Schön, D.A. (1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books. [柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的実践とは何か』鳳書房, 2007]
- Schön, D.A. (1987) *Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. Jossey-Bass. [柳沢昌一・村田晶子監訳『省察的実践者の教育』鳳書房, 2017]

A Collaborative Reflection on “The SHIBU KATSUDO of Hokuriku Branch 2018 of the Society for Teaching Japanese as a Foreign Language” with a Focus on Reflective Practice Report Writing as a Means of Cultivating Professional Learning among Japanese Language Teachers

Yoshiko Hanbara, Fusako Tsujibata, Yoko Kuwabara

This paper is a collaborative reflection of the authors as organizers on the efforts, arrangements and outputs of the ‘Society for Teaching Japanese as a Foreign Language Hokuriku Branch SHIBU KATSUDO Conference’ which was held last September 2018 in Fukui. This conference aimed at supporting sustainable practices and reflections of Japanese language teachers in the Hokuriku region in Japan. For that purpose, the design of the conference is rooted on the idea of creating a space where practitioners can openly and nonthreateningly share with each other (i.e. we are calling it, exchange learning style) as opposed to the more customary lecture style.

In this paper, the authors (ditto organizers of the conference) reflected on the process of designing and organizing the conference, and on specific practices as coordinators of a multicultural co-existence between Japanese teachers and international students. Moreover, the reports (practice records) of the practices shared, the actual happenings during the said conference, and the new insights that the participants were able to gain were summarized and reviewed. As a result of the analysis, the authors propose the value of practice records sharing in supporting Japanese language teachers’ growth as professionals.

Keywords: Practitioner professional development, culture of practice records